

# 海邦養秀—第 18 屆中琉歷史關係國際學術會議

## 摘要

李翊煊

### 琉球考：「琉球」與「大、小琉球」於十八世紀前文獻上的考察初探

臺灣與琉球自古以來的關係相當的密切，主要應該是因為地理位置相近，皆身為孤懸於中國外海的列島，且同樣面對著中國及日本兩個截然不同的勢力，在歷史的發展進程中亦有所相似之處的關係。而從宋元以降至明帝國初期，環中國海的貿易航線開始形成，臺灣與琉球亦是重要的中繼口岸，及海上航行的重要標的，因此不論是臺灣亦或是日本學者在討論這段歷史之時，不可避免地皆得針對史料中的「流求」、「大琉球」及「小琉球」等地名是指稱誰進行考證，甚至出現了百年來的論爭。而本文將藉由探究前人研究及相關史料，試圖針對這些問題提出自己的看法。

關鍵字：流求、琉球、臺灣、奄美大島、宮古島、八重山群島

従来、台湾や琉球の関係はとても緊密である。その理由は多分、地理的な距離が近いし、いずれも中国の近くの離島である。そして、同じく中国や日本両方の勢力を立ち向かえ、歴史の発展過程にも類似性があるかもしれない。更に、東アジア海域での貿易ネットワークは宋と元からの時（10 世紀後半から 14 世紀後半まで）に形成され、しかもかなり盛んでおり。台湾や琉球もすでに重要な中継港や航路での重要な標となっていた。だからこそ、台湾や日本の学術界でこの時期の歴史を研究した時、必ず史料で記録したの「流求」や「大、小琉球」は一体誰でしょうというテーマを検討すべき、100 年以上にもわたって議論さえされてきた。そして、この文章にも前述のテーマについて、先前研究や史料などに通じ、筆者自分自身の論点を提出してみよう。

キーワード：流求、琉球、台湾、奄美大島、宮古島、八重山群島

## 方寶川

### 清代冊封琉球使團從客考論

清朝與琉球王國的交往始於順治之初。康熙二年（1663），張學禮、王垓完成冊封琉球中山王尚質的大典，清朝與琉球的封貢關係正式確立。至同治五年（1866），趙新、于光甲最後一次冊封琉球中山王尚泰為止，在這 203 年間，有清一代，共有 8 次冊封使團、16 位正副使臣往封琉球。其中康熙年間三次、乾隆年間一次、嘉慶年間兩次、道光年間一次、同治年間一次。眾所周知，清代冊封琉球使團除了由正、副使率領朝廷所規定的職司員役外，正、副使還可以隨帶由自己選擇的從客同行。隨行之從客，包括士大夫、高僧、道士、醫生、天文生、書畫家、琴師等各方面的人才。清代冊封琉球使團之從客，見於文獻史料明確記載的有：康熙二年（1663），隨張學禮、王垓使琉球的李光宏、吳燕時、陳翼；康熙五十八年（1719），隨海寶、徐葆光使琉球的平安、豐盛額、翁長祚、陳利州、黃子雲、吳份、徐尊光；乾隆二十一年（1756），隨全魁、周煌使琉球的王文治、徐傳舟；嘉慶五年（1800），隨趙文楷、李鼎元使琉球的王文誥、秦元鈞、繆頌、楊華才、寄塵、李香崖；道光十八年（1838），隨林鴻年、高人鑑使琉球的陳觀西、龐文鴻、佚名琴師；同治五年（1866），隨趙新、于光甲使琉球的有林熙、林筱銘、鄭琴坡、鄭玉甫、李蓮峯、李雨亭等。清代冊封琉球使團之從客，同正、副冊封琉球使一樣，在中琉兩國之間的交往中，既是外交的使者，又是文化的傳播者。他們在琉球期間，除了按規定參與各種冊封典禮的外交活動之外，又有充裕的時間與琉球各屆人士交遊，得以各施所長，通過種種渠道廣泛地傳播中華優秀傳統文化及其醫學、手工業生產技術於琉球居民，從而促進了琉球社會的文明與進步。同時，他們的涉琉著述，也為後世留下了許多珍貴翔實的中琉關係文獻史料，甚至可補冊封使「使錄」類著述的一些記載之不足。所以說，清代冊封琉球使團之從客隨封琉球，對於中琉關係而言，亦具有特殊的歷史作用與深遠的積極影響。

關鍵詞：清代、冊封琉球、從客

## 赖正维

### 清代册封琉球与赐封妈祖探究

妈祖被东南沿海信奉为最重要的航海保护神，宋、元、明、清历代朝廷不断赐封，其封号由宋代 4 个字加封至清代 64 字，封号亦由“夫人”、“天妃”晋升为“天后”，并且列入国家祀典。此间，清廷由于妈祖护佑册封使往封琉球新国王有功，三次应册封使请求增加妈祖封号。历届册封使在海上历险归来后，多次为妈祖求祀、请求增加封号、御赐匾额等，在推动妈祖信仰传播的过程中功不可没。琉球册封使请封妈祖并不仅仅提升了妈祖的地位，更是通过册封活动将妈祖信仰远播琉球，对琉球社会亦产生了深远影响。琉球的妈祖信仰以三座天妃宫为中心长期延续，与两国的朝贡贸易紧密相连，成为古代中琉两国文化交流的重要纽带之一。

关键词：清代、琉球、册封使、妈祖

## 沈玉慧

### 17-19 世紀薩琉隱蔽政策—以漂抵朝鮮的薩摩船為例

薩琉關係隱蔽政策的開端為 1609 年遭薩摩藩出兵入侵後，薩摩藩透過琉球中介展開對明貿易未果，即陸續採行隱蔽政策。1684 年清朝開海後，則可見更具體且周密漂流隱蔽政策。有關薩琉隱蔽政策的研究，主要聚焦於「中國」及「琉球」，如漂抵琉球的中國人、琉球人或乘載琉球人的薩摩船漂流至中國時，以及冊封使節來琉時的隱蔽措施等。但往返於薩摩藩與琉球本島、離島間薩摩船，漂流至朝鮮等異國時，即便無琉球人乘船仍可能暴露琉薩關係，唯對此幾乎未見相關探討。漂抵朝鮮的薩摩藩船之相關研究亦多聚焦於朝鮮王朝與江戶幕府兩政權下的送還體制，即便有個案分析，但並未考察其隱蔽手法。為此，本文將聚焦於薩摩船漂朝鮮時的因應，考察薩摩藩的隱蔽策略。

### 17-19 世紀における薩琉隱蔽政策 —朝鮮に漂着した薩摩船を例として

1609 年の薩摩による琉球侵攻以降、薩摩藩が琉球を介して日明貿易を再開することができず、そのため、次第に薩琉の関係を隠蔽するようになっていった。特に 1684 年に清朝が遷界令を撤回して以降、意図しない漂流・漂着事件がより頻繁に発生するようになり、そのため、薩琉はさらに厳格な隠蔽政策を実施するようになった。

従来、薩琉隱蔽政策に関する先行研究では主に中国と琉球を焦点に当て、中国に漂着した琉球船や琉球人が乗船する薩摩船、あるいは朝鮮に漂着した琉球船の隠蔽対策について考察し解明してきた。ただし、琉球本島・奄美諸島と薩摩との間を往復する薩摩船が朝鮮等の異国に漂着したとき、琉球人が乗船していなくても、薩琉関係が発覚する可能性も考えられるが、それに関する詳細な検討はほとんどなされていない。また、朝鮮に漂着した薩摩船についても、基本的に日朝漂流民送還政策に焦点を当て検討されており、また、個別の事例を詳細に考察したものであっても、その隠蔽の方法に関する検討はほぼなされていないが、朝鮮に漂着した薩摩船がいかなる対応を行うか、薩琉隱蔽政策の一環として検討する余地がある。よって、本稿は 17-19 世紀に、薩摩船が朝鮮に漂着した事例に焦点を絞って、薩摩藩の隠蔽政策及びその姿勢について考察することとする。

## 孫欲容

### 十六至十八世紀中國琉球書寫對朝鮮琉球知識的影響

朝鮮與琉球兩國自十四世紀開始有接觸，在十四、十五世紀期間《朝鮮王朝實錄》以及《歷代寶案》等史料中，可看到琉球曾頻繁的派遣使臣前往朝鮮，在邊境上時有接觸的例子，在這些往來過程中，朝鮮逐漸形成有關琉球的知識。朝鮮接受琉球資訊以及知識有多重的管道，除了雙方的直接接觸，包括琉球使節前往朝鮮，以及漂流到琉球的朝鮮漂流民，還透過與日本往來的過程中得到琉球訊息，除此之外，中國方面的琉球知識也扮演了不可忽視的角色。尤其到了十六世紀以後，除了中國史書中的記載，明清時期的使琉球錄，也成為朝鮮琉球知識重要的來源。

而關於中國琉球知識對朝鮮琉球認識的影響，過去的研究於透過輿地圖等材料分析朝鮮的琉球知識來源已有較為深入的討論，<sup>1</sup>本文則主要透過文獻的分析，探討再朝鮮的琉球知識的形成過程中，中國琉球知識的影響。本文將首先梳理朝鮮獲取琉球知識的幾種管道，接著分析朝鮮引用了哪些中國琉球知識，並進一步討論這些中國琉球知識引進朝鮮的來源，最後討論中國琉球知識在朝鮮琉球敘述中的影響。

#### 16-18 世紀における中国の琉球知識が朝鮮の琉球認識に与えた影響について

14 世紀から朝鮮と琉球は交流があった。『朝鮮王朝実録』や『歴代宝案』などの史料には、14 世紀から 15 世紀にかけて琉球が頻繁に朝鮮王朝に使者を派遣した記録が残されており、朝鮮王朝の琉球認識は琉球との交流を展開することで次第に形成されるようになった。一方、朝鮮王朝は琉球使節から琉球情報を入手するだけでなく、朝鮮に漂着した琉球漂流民や日本と交流することでも、情報を獲得していた。なお、16 世紀から、中国の正史も参考にした明清中国の冊封使節の使琉球録も、朝鮮王朝の琉球に関する情報源であった。

これまで、朝鮮の琉球認識に関する研究では、主に地図やその他の資料を利用し、朝鮮の琉球に関する情報源について検討していた。本稿は、まず文献資料を利用し朝鮮王朝が琉球情報を入手するルートを整理し、そして朝鮮王朝はどのような中国の琉球情報を利用していたか明らかにすることによって、朝鮮王朝の琉球認識が形成された際、中国の琉球情報が朝鮮王朝に度のように影響を及ぼしたか、検討する。

---

<sup>1</sup> 目前有關朝鮮琉球知識的研究，集中在輿地圖討論的相關研究見：沈玉慧，〈朝鮮王朝海外知識的形成與累積——以《輿地圖·朝鮮日本琉球國圖》為例〉，《故宮學術季刊》，第34卷第二期，頁107-163、楊雨蕾、鄭晨，〈多元認識：韓國古輿圖中的琉球形象〉，《海交史研究》，2018，頁40-56。

## 马卫星

### 明清琉球册封使的海洋书写与中琉跨海交流

中琉友好交往 500 余年，册封琉球是中琉交往的重要内容。明清时期的琉球册封使是这段历史最重要的参与者，也是中琉友谊的见证者。使臣们在行至琉球途中，创作了大量的涉海作品，包括使录、奏议、诗文集、碑文、石刻等。这些海洋书写内容丰富、文体多样，是中琉航路上留下的珍贵文献，不仅广泛记录了琉球册封使的所见所闻，而且是其旅途心境的自然表达。本文以李鼎元、萧崇业、徐葆光等历史上具有代表性的琉球册封使为重点研究对象，从海洋角度，探究海洋书写在中琉跨海交流中的独特价值，还原其在中国文化传播过程中的历史意义。

关键词：琉球、册封使、海洋书写、东亚海域

## 郭有志

### 琉球疆域範圍及名稱考略

琉球，一個已經消融在歷史之河中的國度，從曾經是中國明清王朝的藩屬，并憑藉“海上津梁”而活躍于東亞海域的琉球王國，到如今被列為日本都道府縣中編號為 47 的沖繩縣。期間，琉球先後經歷了長達半個多世紀的日本殖民以及二戰後美軍在“國際托管”名義下實施的美軍占領。1972 年，琉球群島被美國單方面移交給日本，對於至今仍然存在大量美軍軍事基地的琉球群島而言，琉球可謂再次落入“日美雙據”的境地。今日之沖繩，已非昨日之琉球。昨日之琉球，亦非今日之沖繩。僅就琉球群島的疆域範圍而言，二者也有很大不同。琉球亡國後，日本則通過使用“南島”“西南諸島”“沖繩群島”等稱謂對琉球疆域和範圍造成認知混亂，企圖解構琉球群島的歷史，掩蓋琉球王國真實的歷史并建立日本關於琉球地理的話語體系。今日我們談及琉球群島疆域及名稱時應回到特定的歷史時期，而不能概而言之。

關鍵詞：琉球；沖繩；疆域；名稱

### 琉球の範圍及び名称について

明清時代に中国の藩属の一つとしての琉球王国は、かつて「海上津梁」と呼ばれるほど東アジアの海域で活躍していたが、現在は日本の都道府県に 47 番目の沖縄県になっている。日本による半世紀以上の植民及び戦後アメリカによる長年の軍事占領を経ていた琉球には、1972 年に日本に渡された後も数多くの軍事基地が敷かれている。沖縄県といっても、その範囲はかつての琉球とは違っている。さらに「南島」や「南西諸島」「沖繩諸島」などの使用によって、琉球の名称及び範囲は混乱になる場合もある。今日、琉球の範囲及びその名称を論述するときは琉球の複雑な歴史を配慮する必要がある。

キーワード：琉球；沖繩；範囲；名称

## 孙家珅

### 重塑琉球：美国占领时期的琉球史叙事

1945年4月1日，美军登陆冲绳本岛。美国军政府沿袭美军在冲绳战役期间对琉球的战略定位，即施行琉球与日本分离的统治原则，确立“亲美离日，扶持琉球主体性”政策，创建琉球人自治机构。为了实现自身战略利益的最大化，美国又以文化教育为手段建构琉球人的历史记忆和族群认同，美军在调查报告、学校教科书、博物馆和琉球通史书中重新进行琉球史叙事，力图彻底改变大和民族对琉球史研究的话语体系，并进一步对“冲绳县民”“日本皇民”进行“琉球化”改造，重塑“新琉球人”。

关键词：美军占领；琉球史；历史叙事；重塑琉球



## 朱德蘭・林育生

### 台灣沖繩交流人物：喜友名嗣正（蔡璋）

喜友名嗣正，漢名「蔡璋」，生平主張回復琉球原來的國家權力與主權獨立地位，與台灣當局交往密切，是 1950-1960 年代中琉（台沖）交流活動的重要推手。與此同期，中國國民黨政權為防止共產勢力滲透台灣，強化區域戰略夥伴關係，而暗中支持喜友名嗣正（蔡璋）從事琉球獨立運動。

回顧過去的研究，已有不少學者分別從不同的視角，圍繞著琉球獨立運動、琉球地位、琉球相關團體等議題進行探討，累積了大量優秀成果。本文梳理台北中琉文化經濟協會典藏文書，針對喜友名嗣正主要參與的六個團體，及至其淡出台灣交流領域的過程進行探討。分別論及：一、琉球青年同志會與琉球革命同志會的政治運動；二、琉球人民協會與琉球中琉文化經濟協會的公益活動；三、成立琉球國民黨參加亞洲反共陣營活動；四、結束琉球團體的任務，藉由實證性的分析以彌補既往研究領域之不足。

喜友名嗣正（漢名：蔡璋）、琉球の国家権力の回復や主権独立を主張した人物である。台湾当局とは密接な関係を持ち、1950-1960 年代において中琉（台沖）交流活動の重要な推進者でもある。一方、中国国民党政権は共產勢力の浸透を防止し、地域戦略パートナー関係を強化するため、喜友名嗣正の琉球独立運動を支持した。

先行研究では、すでに多くの研究者は多様な視点から、琉球独立運動、琉球地位、関連団体などの側面をめぐって論じられてきて、数多い研究成果が累積されてきた。本研究では、主に台北中琉文化経済協会の文書コレクションから、喜友名嗣正が参加した六つの団体、および彼が台湾交流から退場した経緯を論じる。本文では、以下の四つの点を論じる：一、琉球青年同志会と琉球革命同志会の政治運動。二、琉球人民協会と琉球中琉文化経済協会の慈善活動。三、琉球国民党の成立とアジア反共運動の参加。四、琉球団体の任務終了。こうした分析を通して、先行研究の不足を補う。

李志鴻

琉球王權與文化意象的建構：以都城風景為中心

本文以十六世紀琉球王國為例，透過考察琉球王國都城的大型佛教寺院與紀念物，探討琉球王國官方如何在當時的東亞世界中，構築其佛教王權與形塑琉球王國特出的「風景」。崛起於東亞海域的琉球王國，透過中、日兩國僧人、海商、使節作為東亞文化的中介者，不僅取得了中國、朝鮮、日本的佛教經典與器物，也開始嘗試使用佛教在琉球構築佛教王權。自十五至十六世紀，琉球王國官方開始在都城首里城兩側建築大型的佛教寺院天界寺與圓覺寺，這兩座寺院代表著琉球王國的佛教源於中國、日本的佛教傳承，天界寺、圓覺寺也是王權實踐佛教禮儀的神聖空間。除了都城核心區的大型佛寺，鄰近那霸港口的官寺也形塑著琉球王國海上佛教的景觀，琉球王國彷彿是東亞海域的理想佛國土。值得注意的是，琉球王國官方在首里城周遭種植萬棵松樹並設立「萬松嶺碑」，石碑、松樹形塑著首里城的風景，在首里城的居民眼中，王宮彷彿是佛教禪林。擺置在首里城門口處的「萬國津梁之鐘」以及正殿前的欄杆，都是琉球王國官方展示琉球國王作為理想佛教聖王的文化與視覺裝置。琉球王國的紀念碑與紀念物不僅乘載著佛教王權的符號，同時也形塑著琉球王國特殊的「風景」。此一風景則反映著十六世紀琉球王權所認知的東亞世界，以及琉球王國積極吸收外來知識的在地創意與能動性。（會議論文初稿，請勿徵引）

關鍵詞：東亞佛教文化交流、佛教王權、尚真、圓覺寺、萬松嶺

## 琉球王権と文化的イメージの構築：都城の風景を中心に

本稿は十六世紀の琉球王国を中心に、琉球王国都城の大型仏教寺院と記念物の考察を通じて、琉球王国は当時の東アジア世界には、如何に自らの仏教王権を構築し、琉球王国独自の「風景」を形作るのを検討する。東アジア海域で活躍した琉球王国は、日中両国の僧侶・商人・使節という東アジア文化の仲介者により、中国・朝鮮・日本の仏教経典と器物をもらい、仏教を利用し琉球で仏教王権の構築も試みた。十五世紀から十六世紀にかけて、琉球王国は公式に都城首里城の両側に巨大な仏教寺院天界寺と円覚寺を建てた。これらの寺院は、琉球の仏教はそれぞれに中国や日本からの伝承を示しながら、王権が仏教儀礼を実践する神聖たる空間でもある。都城中心部の大型寺院のほかに、那覇の港に近隣する官寺も琉球王国の海上仏教というイメージを形作った。琉球王国はまさに東アジア海域に浮いてある理想的な仏国土のように見える。また、琉球王国は公式に首里城の周りに万本の松を植え、「万松嶺碑」を立てた。石碑も松も首里城の風景になり、首里城住民の目から見れば、王宮はまさに仏教禅林のように見えた。首里城の入り口に置いてある「万国津梁の鐘」及び正殿前の欄干は、すべて琉球国王が理想的な聖王に擬える文化そして視覚的な装置である。琉球王国の記念碑と記念物は仏教王権のシンボルでありながら、独自の「風景」にもなり得る。この風景は十六世紀に琉球王権が認識した東アジア世界の様態、そして琉球王国が積極的に外来知識を受容するローカル的な創出と能動性を反映した。

キーワード：東アジア仏教文化交流・仏教王権・尚真・円覚寺・万松嶺

## 胡 新

### 清代琉球國王表文奏本探析

明清时期，琉球朝贡中國必須攜帶表文、奏本這一外交文書，根據『歷代寶案』、『清代琉球國王表奏文書選錄』以及檔案構成全面統計，琉球國主（國王、世子、世孫、世曾孫）向清代皇帝呈遞表奏文書 111 次，其中表文 215 件，奏本 183 件，合計 398 件。按照類型劃分，表文可分為進貢、謝恩、慶賀、進香、請封、補表、其他 7 種類型，奏本亦有 7 種類型，與表文相比，缺少進貢而多出官生一項。近年來，筆者發現出版的琉球檔案以外，中國第一歷史檔案館還藏有琉球表奏文書 9 件，中央研究院歷史語言研究所也藏有琉球表奏文書 3 件，另外哈佛大學燕京圖書館藏有乾隆二十一年（1756）進貢表文，北京國家圖書館藏有乾隆十一年（1746）補進表章奏本和嘉慶五年（1800）進香先帝奏本。至於伊波普猷對三藩之亂時進貢表文「空道」的使用問題，筆者認為並沒有用於清朝和靖南王兩者間的政治抉擇中，並認為王士禎記載琉球表文由福建地方官吏幫忙代擬的觀點值得檢討。

### 清代琉球國王表奏文書の考察

明清時代、琉球が中国に進貢する際の必携の表文、そして奏本といった外交文書については、『歴代宝案』『清代琉球國王表奏文書選錄』および档案史料によって全体的な把握統計が可能である。琉球国主（国王、世子、世孫、世曾孫）が清代皇帝に呈上した表奏文書は計 111 回、計 398 件（表文 215 件，奏本 183 件）に及ぶ。文書の内容分類は進貢、謝恩、慶賀、進香、請封、補表および其の他の 7 種に類型化できる、奏本もまた 7 種に類型化できるが、表文と比較すると進貢が少なく、官生に関する内容が多いといった特徴が見い出せる。近年多くの档案史料が刊行されているが、筆者はそれ以外に、中国第一歴史檔案館に表奏文書 9 件、中央研究院歷史語言研究所に表奏文書 3 件が収蔵されていることを確認した。それ以外にも、ハーバード大学燕京図書館に乾隆二十一年（1756）の「進貢表文」、北京国家図書館に乾隆十一年（1746）「補進表章奏本」と嘉慶五年（1800）「進香先帝奏本」といった表奏文書が収蔵されている。本稿では、そうした表奏文書全体を俯瞰し、文書学的な検討をする。さらに本稿では、伊波普猷が指摘する三藩の乱の際に使用されたとする進貢表文の「空道」について、これまでの学術的な指摘とは異なり、清朝と靖南王の両者の政治的対立の狭間で「空道」は使用されなかったという新しい視点を示したい。また王士禎が指摘する琉球の表文が福建地方官吏によって校正されたという問題についても、これまでの指摘とは異なる視点を示したい。

## 平川 信幸

### 琉球國王肖像畫的正面考察 — 與東亞帝王像做比較 —

琉球所有的肖像畫包括御後繪，都是正面像。在與從鎌倉時代至江戶時代的日本肖像相較之下特徵十分鮮明。日本的多數肖像畫，除某些例外以外，都是以面像朝右或朝左的姿態描繪。相反地，中國明清及朝鮮王朝的祖先畫都與琉球同樣是正面描繪。據此可以想像，琉球的肖像畫應該是受到 14 世紀以後中國及朝鮮等東亞各國的正面肖像畫的影響。特別是冊封關係建立以來，傳由中國的各項制度對琉球的影響不能小覷。

本稿針對御後繪與日本泉湧寺的天皇肖像畫、朝鮮王朝的國王肖像畫、中國南薰殿圖像的帝王像主等的朝向做考察。琉球國王的肖像畫和御後繪中有 10 張正面的肖像。然而，保存於泉湧寺的日本江戶時代（17 世紀以後至 19 世紀）的天皇肖像畫，全都是或左或右的斜面朝向。相較於此，朝鮮王朝的國王『太祖御真』肖像畫，卻和御後繪同樣都是坐在椅上的正面畫。

中國在宋朝對人體正面描繪賦予特別的涵義。除了神佛像以外，即便是皇帝的肖像畫也不輕易採用，有著極度嚴格的限制。在南薰殿的帝王像中，宋代皇帝的肖像畫每張都是斜面朝向的。之後的元代也是同樣的狀況，直到最後的皇帝寧宗之肖像畫，才描繪出偏正面的斜面作品。至於明代，到了第 5 代『宣宗像』都還是斜面朝向的，直到第 6 代『英宗像』起首度出現了正面的皇帝畫像。而且不僅是皇帝像，甚至如「王鏊像卷」的高官肖像畫，也出現了正面朝向的作品。據此得知中國的人物的正面描繪在 16 世紀已經普遍。據此推測包括御後繪的琉球肖像畫應該是受到 16 世紀以後中國肖像畫的影響。

## 琉球国王肖像画の正面性の考察 —東アジアの帝王像のとの比較から—

御後絵を含む琉球の肖像画は、全てが正面像となっている。これは鎌倉時代から江戸時代にかけての日本の肖像画と比べると際だった特徴となっている。日本の肖像画の多くは、一部の例外をのぞいて、いずれも右か左を向いた姿で描かれている。対して、中国の明・清や朝鮮王朝の祖先像は琉球と同じような正面を向いて描かれている。このことから、琉球の肖像画は 14 世紀以降の中国や朝鮮などの東アジア諸国の正面を向いた肖像画の影響を受けていると考えられる。特に冊封関係を通じて、諸制度を取り入れてきた中国から琉球への影響は無視できない。

本稿では、御後絵と日本の泉涌寺の天皇の肖像画、朝鮮王朝の国王の肖像画、中国の南薰殿図像の帝王像の像主などの向きについて考察を行った。琉球国王の肖像画、御後絵は、確認できる 10 枚とも正面を向いている。一方で、泉涌寺に格護されている日本の江戸時代（17 世紀以降から 19 世紀）の天皇の肖像画は、全てが左右のいずれかの斜め向きである。対して、朝鮮王朝の国王の肖像画『太祖御真』は、御後絵と同じように、椅子に座って正面を向いていた。

中国、宋では、人体の描写の正面性は特別な意味があり、神仏の像以外、皇帝の肖像画においてすら、容易にはされない、極めて限定されたものであった。南薰殿の帝王像で宋代の皇帝の肖像画はいずれも斜めを向いていた。また、次の元も同じような状況であったが、最後の皇帝の寧宗の肖像画で、正面に近い斜めの作品が描かれる。明では、5 代『宣宗像』までは、斜め向きであったが、6 代『英宗像』の頃になって正面を向いた皇帝像が初めて描かれるようになる。さらに皇帝像だけではなく、高官の肖像画「王鏊像卷」のような、正面向きの作品も出てくる。このことから中国で、16 世紀に人物が正面向きで描かれるのが一般的になることが分かる。御後絵を含む琉球の肖像画は 16 世紀以降の中国の肖像画の影響を受けたと考えられる。

## 比嘉吉志

### 19 世紀後半在琉球的唐錢 — 以流入和規制問題為中心 —

本稿依據琉球史料の編年排序，針對 19 世紀後半由歐美人士攜入琉球而以那霸為中心流通的唐錢，就其流入與規制問題加以檢討。王府在拒絕對歐美通商時，所採取的策略是拒收對方支付所需品所使用的唐錢。據說渴求唐錢在那霸流通的琉球人，到清國私鑄唐錢帶往國外去，在薩摩也被發現有從清國攜入的零碎私鑄錢（「鉛小錢」）。為因應這些政治問題，1855 年發佈了永久禁止唐錢流通的嚴格政令。然而在琉法修好條約締結之下，為了規避歐美人士用唐錢在民間買賣商品所發生的困擾，一改禁令而認同唐錢的流通。但對於唐錢中的「害錢」，亦即從清國帶入琉球的私鑄錢之使用不予認可。其後王府對於唐錢的規制也一直變換不定，1860 年代在「文替（匯差變動）」的影響下，隨之的銅錢價值高漲，定會造成把唐錢由清國帶入琉球圖利者的出現，基於此一顧慮，王府發出了第三次流通禁令。後來因為銅線不足引發了經濟混亂，於是再度開放僅限國內的唐錢流通。如上所述，雖然唐錢的規制政令反覆更易，但在政治方面王府還是以唐錢的流通規制為第一考量。而結果顯示，王府的唐錢規制最後難以起到作用的原因在於，19 世紀半流入的唐錢已經以那霸為中心，而在琉球的錢幣經濟上成了不可或缺的一部分。

### 19 世紀後半の琉球における唐錢—流入と規制をめぐる問題を中心に—

本稿は、19 世紀後半に欧米人らが琉球に持ち込み那霸を中心に流通した唐錢について、その流入と規制の問題を、琉球側の史料から時系列に検討するものである。王府は欧米との通商を拒否するなかで、彼らが所望品の支払いとして使用した唐錢の受け取りを拒否する政策をとっていた。那霸における唐錢の流通許可が要望されるなか、琉球人が清国で密鑄された私鑄錢を国外に持ち出したという疑惑がかけられ、薩摩でも清国から持ち渡った零細な私鑄錢（「鉛小錢」）が摘発される。これらの政治的な問題への対応として、1855 年には唐錢の流通を永久に禁止する厳しい判断がなされた。しかし、琉仏修好条約が締結され、欧米人が唐錢を民間での商品売買に使用することで生じるトラブルを回避するため、一転して唐錢の流通が認められる。ただ、唐錢のなかでも「害錢」と呼ばれ清国から琉球に持ち込まれた私鑄錢については、その使用が認められなかった。この後も唐錢をめぐる王府の規制は変転をつづけ、1860 年代の「文替り」の影響で銅錢の価値が高まると、清国から利を求めて唐錢を琉球に持ち込む者が現れるのではないかという危惧から、三度の流通禁止令が出される。それも銅線が不足して経済が混迷するなかで、国内に限って唐錢の流通が再開された。以上のように、唐錢をめぐる規制政策は二転三転したが、王府は政治的な側面からは唐錢の流通規制を第一と考えていた。結果として王府の唐錢流通の規制が十分に機能し得なかったのは、それだけ 19 世紀後半に流入した唐錢が、すでに那霸を中心とする琉球の錢貨経済において欠かすことのできないものになっていたことを示している。

富田千夏

## 人文情報學之於中琉關係史資料的展望—數位化資料的長期維持之一環—

在對收集而來的古文獻資料之長期維持管理的課題上，資料的數位化處理無論在資料保存的目的上或是利用者的便利性而言都有更高一層的意義，於是近年來多數的資料保存機關開始推動數位化資料事業。然而很多機關在數位化資料的架構和運作上所面臨的問題是「如何長期維持」，這個難處就從目前無法利用的「沖繩歷史情報研究會」的實例開始說起。

本稿針對數位化資料的長期維持課題，就「人文學上情報學技法和技術的應用」之人文情報學的手法採用，試舉琉球大學附屬圖書館的「琉球沖繩關係貴重資料數位化資料」之 IIIF(International Image Interoperability Framework)化處理事例以及重新啟動「沖繩歷史情報研究會」所作「琉球家譜」資料的嘗試。現在無法使用之「沖繩歷史情報研究會」的原檔中，以 CD-ROM 版收錄的「琉球家譜」資料，可以轉換成適用於現在系統的形式，再度受使用。藉著「琉球家譜」的資料文件的現行系統，採用實際標準的 TEI (Text Encoding Initiative) 試行轉換，希望能就有關數位化資料的長期維持，一起檢討所屬機關及研究學者所能做的努力，期待今後能將數位化資料內容有關的課題共同分享。

### 人文情報学から中琉關係史資料へのアプローチ デジタル化資料の長期維持に向けた取り組みの一つとして

収集した古文献資料の長期的な維持管理のなかで、資料を電子化することは資料保存の目的や利用者の利便性を高める意義もあり、近年多くの資料保存機関がデジタルアーカイブ事業を展開している。デジタルアーカイブを構築・運営していく上で多くの機関が直面している問題は「如何にして長期的に維持するか」であり、その難しさは現在利用ができない「沖繩の歴史情報研究会」の事例が物語っている。

本稿では、デジタル化された資料の長期維持に向けた取り組みとして、「人文學に情報學の技法や技術を応用する」学問である人文情報學 (Digital Humanities) の手法を取り入れ琉球大学附属図書館の「琉球・沖繩關係貴重資料デジタルアーカイブ」を IIIF(International Image Interoperability Framework)へ対応した事例や「沖繩の歴史情報研究会」にて作成された「琉球家譜」のデータを再利用する試みを紹介する。現在利用ができない状況である「沖繩の歴史情報研究会」テキストデータのうち、CD-ROM 版に収録されていた「琉球家譜」のデータについては現在の環境に適したデータの形へ変換することで再度利活用が可能である。「琉球家譜」のデータファイルを現在の環境で利用可能なデータに変換した上でデファクトスタンダードである TEI (Text Encoding Initiative) に適用する試行的な取り組みを通して、デジタル化された資料の長期的な維持について機関側と研究者が出来る事とは何かを検討し、今後のデジタルコンテンツのあり方について課題を共有したい。



## 紺野達也

### 琉球蔡大鼎漢詩文中之“科”與“科舉”

近世琉球王國以“科”（亦云“科試”等）選拔人才，是眾所周知。但是，琉球士族如何看“科”，其研究尚有一些餘地。本稿以琉球王國最末期久米村士族之蔡大鼎（1823-1885？）的漢文詩文與他的別集所收之序文為主，試析蔡大鼎及其周圍人物對於琉球的“科”與中國的“科舉”之態度。

道光三十年（1850）春，蔡大鼎在選拔久米村“漢文方”官員之“科”上考取第一名，實際上，此次“科”可能是第一次選拔漢文組立役主取兼著作文章總師。當時，蔡大鼎學習和創作漢文詩文，仔仔不倦，在此“科”上就考取一甲。從久米村士族的觀念來說，此是值得隆重表彰的。但是，清人所寫之序文，除個別例外，幾乎沒提到蔡大鼎考上“科”之事情，他們應不知在琉球施行“科”，即使知道“科”的存在，可能沒有準確的知識。

琉球王府認為實行“科”選拔官員是國家所需之制度，至少表示著如此的態度。因此，當時，王府向得及第之士族賜宴，蔡大鼎亦參加此宴。琉球士族也充分理解“科”與國家之間的關係，所以蔡大鼎在詩文中幾次提到“科”的通過讓考生獲得閃耀名聲，同時使家世取得輝煌榮譽。

蔡大鼎將一些詩與尺牘贈給福州人士，亦期待他們登科。但是，在這些作品中，蔡大鼎卻一直沒提到他們家世的榮譽。他們都是蔡大鼎的教師和尊長，因此，他可能認為他們家世已有榮譽，不必強調家世。

關鍵字：科、科舉、蔡大鼎、久米村、琉球漢詩文

## 蔡大鼎の漢詩文における「科」と「科挙」

近世の琉球では、「科」（「科試」などともいう）によって官員が選抜されていたことは広く知られている。しかし、琉球の士族が「科」をどのように考えていたかについては、なお十分に明らかになっていない。本稿では、蔡大鼎の漢詩文やそれを収めた漢詩文集の序を中心に、彼とその周囲の人物の琉球の「科」、そして清朝の「科挙」に対する態度について、分析を試みた。

蔡大鼎は道光三十年（1850）春の漢文方の「科」に首席で及第している。この「科」は実質的に漢文組立役主取兼著作文章総師を選任する最初の試験であった可能性がある。当時、蔡大鼎は漢詩文の学習と創作に努め、そしてこの漢文方の「科」を首席で及第したのである。当時の久米村の士族にとって、このことは十分に顕彰に値するものであった。一方、清人の記した序文には、個別的な例外を除いて琉球の「科」についての言及はほとんどない。つまり、清人は琉球で「科」が行われていることを知らなかったと考えられる。かりにその存在を知っていたとしても正確な知識を持っていなかったと思われる。

当時、王府は「科」による官員の選抜は国家に必要な制度であると認識していた、少なくともそのような姿勢を示していた。そのため、「科」の及第者に祝宴を下賜しており、蔡大鼎もそれに参加している。琉球の士族の側もそのような「科」と国家の関係を十分に理解していた。そのため、蔡大鼎はその漢詩文において、「科」の及第が受験者自身のみならず、その先祖や子孫といった一門の名誉となることにしばしば言及する。

蔡大鼎は福州の人士にも詩や尺牘を贈っており、そこでも彼等の科挙の及第を期待する。しかし、それらの作品においては、彼等の一族の名声は一貫してほとんど表現されない。彼等は蔡大鼎の師、もしくはそれに目上の人物であった。そのため、蔡大鼎はその一族の名声は既存のものであり、それを改めて述べる必要はないと判断したと考えられる。

キーワード：科、科挙、蔡大鼎、久米村、琉球漢詩文

## 前堂颯世

### 蔡文溥的「同樂苑八景」

蔡文溥的「同樂苑八景」收錄於蔡文溥所著『四本堂詩文集』、家譜資料以及周煌『琉球國志略』、潘相『琉球入學見聞錄』等，足以推測是當時膾炙人口之作。與蔡文溥之「同樂苑」相關的詩文有「同樂苑序應令」(序文)、「同樂苑應令恭呈二首」(律師二首)以及「同樂苑八景」(絕句8首)。

在過去的研究中，除了早前的「同樂苑八景」的訓讀和注釋外，還有針對「同樂苑」詩文的成立時期及八景的成立狀況做過探討。但過去這些研究皆未曾對「同樂苑」所有相關詩文做全面的分析。於是本稿便以有關「同樂苑」的所有詩文的分析為中心，探討蔡文溥的詩文在「同樂苑」及其「八景」上所賦予的意味。

考察之下發現，有關蔡文溥「同樂苑」的詩文，除了「八景」之「同樂苑」景觀的表現以外，還帶著「應令」及「公宴」的性質，讚揚開設「同樂苑」的尚敬王。再把焦點放在「八景」的描寫上時，可見其以周邊的風景為著眼點、對其佳名的由來做說明，以及歌頌尚敬王之德等多樣內容。可以說蔡文溥是在特意選定景物後，將其用詩表現。

另外值得一筆的是，「同樂苑」舉出象徵尚敬王治世的表現。在作「同樂苑」時，取出「八景」中之一部分景物，將其與思國思民的尚敬王之德相呼應，並讚頌在此德政下琉球必有「春天」來訪。換言之，其中已影射出尚敬王以德治國之事。

拙考所見，因蔡文溥的詩文中對「同樂苑」及其「八景」附加的意味，使得「同樂苑」不單只是國王的庭園，而為「中山之名勝」，可能也是「與民同樂」的場所。

## 蔡文溥「同樂苑八景」について

蔡文溥「同樂苑八景」は、蔡文溥の著作である『四本堂詩文集』や家譜資料、さらには周煌『琉球國志略』、潘相『琉球入學見聞録』などに収録されており、広く人口に膾炙された詩と推測できる。蔡文溥の「同樂苑」に関する詩文は、「同樂苑序應令」（序文）及び「同樂苑應令恭呈二首」（律詩 2 首）、「同樂苑八景」（絶句 8 首）がある。

先行研究では、まず「同樂苑八景」の訓読・注釈がなされている。そのほかに、「同樂苑」の詩文の成立時期及び八景の成立状況が検討されている。しかし、先行研究では、蔡文溥の「同樂苑」に関する全ての詩文を分析しているわけではない。そこで、本稿では「同樂苑」に関する全ての詩文の分析を中心に、蔡文溥の詩文がどのような意味を「同樂苑」やその「八景」に付与したのかについて考察した。

その結果、蔡文溥の「同樂苑」に関する詩文が、「八景」ひいては「同樂苑」の景観だけを表現したものではなく、「応令」や「公宴」といった性質を備えながら、「同樂苑」を開いた尚敬王に対する称讃を表現したものであることを明らかにした。「八景」の描写に注目すると、周囲の風景に主眼を置くもの、または佳名の由来を説明するもの、尚敬王の徳を讃えるものなど様々なものがあり、蔡文溥が景物を意識的に選定し、詩に表現したと指摘した。

また特筆すべき点として、蔡文溥の詩文において、これら 8 つの景物が「同樂苑」の「八景」であることを明示しながらも、尚敬王の徳によって「同樂苑」だけでなく琉球全体にまで影響を与える景物として表現されていることを挙げた。換言すれば、詩文によって「同樂苑」やその「八景」に意味が付与され、琉球全体へと影響するものとして表現されるからこそ、「中山の名勝」となるのであり、「同樂苑」は「民と楽しみを同じくする」ための場所となりうるのではと考察した。

## 蔡天相

### 两种《琉球诗课》诗题考述

清道光年间国子监教习孙衣言选辑的《琉球诗课》，是清代第八批琉球官生模仿中国科举试诗的习作诗集，也是清代科举增设试帖诗后琉球官生的首部试帖诗集。同治年间，在孙衣言的影响下，国子监教习徐干仿孙衣言辑本，也为第九批琉球官生选编了同名诗集。这两种诗集对于研究琉球官生汉诗流变及琉球当地试诗具有重要的参考价值。总体而言，两部诗集深受以往清代科举试律的影响，二者在选题倾向上展现出明显的趋同性，并有一些题目重合；同时，在两位教习个人经历等方面的影响下，两部集的诗题又有着与各自成书时代的科举试律潮流有所脱节（滞后）的特征。

关键词：试帖诗；琉球官生；清代科举；孙衣言；《琉球诗课》

清朝の道光年間に、国子監教官の孫衣言が編集した『琉球詩課』は、清朝第 8 陣の琉球官生が中国科挙の試帖詩を模倣した習作詩集であり、清朝科挙に試帖詩が増加された後の琉球官生の最初の試帖詩集でもある。同治年間、国子監教官の徐幹は孫衣言から影響を及ぼすので、孫衣言の詩集を模倣し、第 9 陣の琉球官生に同名の詩集を編集した。この 2 つの詩集は琉球官生が作った漢詩の流れや琉球試帖詩の研究にとって大切な参考価値がある。要するに、2 つの詩集は清朝その前の科挙詩題の影響を深く受けて、両方も詩題の選び方で明らかな共通点を示し、そしていくつかの詩題が同じである。また、二人の教官の個人的な経歴などから影響されるので、2 つの詩集の詩題はそれぞれの完成した頃に存在する科挙試帖詩の流れと比べて、少し時代に遅れた特徴を持っている。

キーワード：試帖詩 琉球官生 清代科挙 孫衣言 琉球詩課

## 聶友軍

### 巴茲爾·霍爾·張伯倫的琉球研究

近代旅日英國學者巴茲爾·霍爾·張伯倫（Basil Hall Chamberlain）在其百科全書式日本研究巨著《日本事物誌》（*Things Japanese*，1890年初版）中單設「琉球」條目，另有五個條目或多或少涉及琉球。張伯倫以1893年3月在那霸生活和考察一個月為基礎，對琉球展開持續研究，廣泛涉及琉球風尚習俗、居民、記數表達法等領域，而尤以琉球語研究方面用力最勤、成果最多。張伯倫的部分琉球研究成果兼具遊記的紀實特征和文學筆法，對某些領域的探討相對欠缺科學方法和理論支撐，相應地有些結論也難以令人完全信服，但類似缺憾無掩他求真求實的研究訴求。張伯倫前期頗為厚重的日本研究為他積累了十分有效的區域國別研究方法論，並自然形成對琉球研究的正向遷移，其琉球研究方法介於「對象主義」和「方法主義」之間。因其出身地位以及長期在日本生活而受日本社會主流思想影響，一定程度上導致他厚古薄今，對日本強行將琉球滅國的殖民行徑批判不足。

關鍵詞：張伯倫；琉球；風尚習俗；琉球語

### バジル・ホール・チェンバレンの琉球研究について

近代訪日のイギリス学者であるバシル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）は百科事典と言われる日本研究に関する大著『日本事物誌』（*Things Japanese*，1890年初版）を執筆した。『日本事物誌』の中では「琉球」という項目が立てられ、ほかの5つの項目も多かれ少なかれ琉球に触れていた。1893年3月の那覇での1ヶ月の生活と考察に基づき、チェンバレンは琉球に関する研究を展開し続けていた。研究は琉球における風習や住民から記数法まで幅広い分野にわたっている。その中で最も力を尽くし、成果を上げたのは琉球語の研究である。チェンバレンの琉球研究の成果は一部が旅行記のノンフィクション的な特徴と文学の特徴を兼ね備えている。いくつかの領域への探究は科学的な方法と理論的な支えが足りないところがある。それゆえ、一部の結論は説得力に欠けているという不備が指摘できる。しかしながら、彼の真実を求めるといふ研究に対する態度が窺える。チェンバレンは前期の日本研究を通じて、非常に有効な地域研究の方法論を身につけ、自然にそれを琉球研究に生かした。その研究方法は「対象主義」と「方法主義」の間に位置付けられる。出身地の影響及び長年日本で生活したため、日本社会の主流思想の影響を受けたことで、チェンバレンは古典的なものを重んじ、新しいものを軽んずる傾向がある。この影響によって、彼は強制的に琉球を滅ぼしたという日本の植民地主義の行為に対する批判が不足である。

キーワード：チェンバレン；琉球；風習；琉球語

## 劉富琳

### 中琉交流史上的樂師

隨著 1372 年琉球與中國建立冊封朝貢關係和 1392 年明賜閩人三十六姓到琉球，中國文化便源源不斷傳入琉球，其中包括音樂舞蹈戲曲，在這傳播過程中，樂師發揮了重要作用。擔任樂師的有閩人三十六姓、久米村子弟、冊封隨從人員、飄風難民以及琉球朝貢人員、來華留學生等，因缺乏史料記載，大部分樂師已無從查考。拙稿從三弦樂師、古琴樂師、組踊樂師、禦座樂與路次樂樂師四個方面，對樂師在中琉交流史上的貢獻作了一個論述，可以幫助理解琉球音樂舞蹈戲曲的形成、發展與中國的聯繫。

### 中琉交流史における樂師

1372 年に琉球と中国が冊封朝貢関係を結び、1392 年に明から福建人三十六姓が琉球に下賜されると、中国文化は絶えず琉球に伝えられた。その中には音楽や舞踊、戯曲が含まれ、その伝播過程において、樂師は重要な役割を果たした。樂師には閩人三十六姓、久米村の子弟、冊封の従者、漂流民及び琉球の朝貢者、中国への留学生などがいたが、史料の記載が乏しいため、大部分の樂師に関しては考察が進んでいない。拙稿では、三弦の樂師、琴の樂師、組踊の樂師、御座樂および路次樂の樂師という 4 つの側面から中琉交流史における樂師の貢獻について述べる。これは、琉球の音楽と舞踊ならびに戯曲の形成と発展、そして中国との関係を理解するのに役立つだろう。

## 廖肇亨

### 清代中葉琉球冊封使の生態觀察：以李鼎元〈琉球草木詩〉為例

明清兩代琉球冊封使在留下琉球王國相關的作品當中，觸及生活經驗或異國見聞，固然屢見不鮮，可以說是中國文學當中域外書寫的寶庫。不過總體而言，詩人寫作的主題多數仍以詩酒酬酢為主，間或及於自然風光或民間習俗。歷代琉球冊封使滯琉期間，或多或少接觸到異國事物與風俗，在其詩作留下記錄乃勢所必然，原無足奇，但類似李鼎元（1749-1812）一般，刻意就動物、植物、方物、風俗等留下各種形式的組詩的詩人亦不多見。從博物書寫的角度來看，冊封副使李鼎元渡琉期間留下的一系列組詩在清一代域外博物書寫系譜擁有不應遺忘的一席之地。李鼎元渡琉出使琉球之後，曾經創作〈琉球草木詩二十四首〉描寫琉球王國的花草樹木，堪稱異國生態觀察。題下有注，就其自然質性詳細說明，將花木在文化交流歷程中所展現的特色描寫入微，並開創了傳統詠物詩題材的新視野。

### 清朝中期に琉球冊封使節の自然觀察 —李鼎元「琉球草木詩」を中心として—

明清の琉球冊封使が残した記録、当時、琉球王国の姿を面目躍如に描かれて、貴重な史料としての価値が強調されて、昔から史家に重要視されてきたのである。冊封使が琉球王国での見聞をテーマとする詩文は中国文学史にも特別な一角を占めてると言っても過言ではあるまい。海洋文学からも旅行文学からも異国情調からも琉球冊封使の作品はかけかえない存在である。嘉慶五年の冊封副使李鼎元は徐葆光ほど知られている人物ではないけれども、『使琉球記』という著作にも書き上げ、一時期、東アジアの知識人の間に注目を集めてきたことは当時、東アジアでの人気作家も言えよう。琉球王国に滞在する期間、李鼎元は琉球王国の海洋生物、草木及び風俗をテーマとする漢詩を創り出して、特に「琉球草木詩」（24首）は琉球王国の植物を題する体系的な作品で、李鼎元は独自の方法を以って琉球王国での自然観察を記録している。その上、異国の物事をテーマとする詠物詩の題材を広めていくことが李鼎元が文学史で取り上げる功績に間違いがない。